

■ネコ娘が騙されて売春させられて金で身体を売るのにどっぷりハマる話 後編

少年に騙され、モデル撮影という名のハメ撮り強姦をされてしまったネコ娘。
更に映像が本当に商品として流通されたくなければ、また少年との行為をするように命令される。

「なっ……そんなことできるわけ……！」

【いいの？ なら動画をネットに公開するけど。ちなみに捕まえたりしてもムダだよ。

自動投稿で設定してるから、定期的にボクがサイトで操作しないと自動で公開されるからね】

「そんなっ！」

(あの動画が、万が一みんなに見られたら……！)

弱点であるマタタビを少年が持っている以上、力尽くでの解決は難しい。

人間の警察に頼もうにも、自動投稿に設定されていれば

彼が捕まった瞬間に情報公開がほぼ確定してしまう。

もしそれに対処できたとしても、用意周到な彼のことだ。また別の手段でネコ娘を脅せるのだろう。

被害のことは仲間知られたくないため、妖怪たちを頼ることもできない。

となれば、ネコ娘はもう少年の言うがままに従う他なかった。

【まあ、割り切って売春しようよ♪ ちゃんと報酬は出すから……ね♪】

「……………っ！」

(悔しいけど……一度撮られた以上、どうしようもない……。

何か隙を見つけるまで、こいつに従うしか……)

【じゃ、来週の同じ時間によろしくねー♪】

下着の中に捻じ込まれそうになる札束を奪って握り締めると、

屈辱的な感情を押し殺して自宅……妖怪横丁に帰還する。

沈む彼女とは対照的に、待っていたのは歓喜の言葉であった。

大きすぎる代償を払ったとはいえ、手にした金銭は多額。

それを使って購入したお土産の数々は仲間たち、

そして想いを寄せる相手を喜ばせることができたのだ。

人間界を通じてしか味わえない幸福。

それを改めて見せられてしまったネコ娘は、強姦少年への悪感情を緩和させてしまう。

(……うん……。アタシがどれだけ汚れようが、喜んでもらえればそれでいいじゃない。

それに、きっと裏をかく方法があるはず。あいつに従うのは、今だけよ……！)

言ってしまうえば、金さえ手に入るならば自分はどうなってもいい。

反撃の機会もいつか来るはず。今にも湧き上がりそうな憎悪の念を、

効くかどうか分からない人間用の避妊ピルと共に飲み込むのだった。

◆
……約束の日。

ネコ娘は『スタジオ』入口前で、少年と再会する。

【あ、ホントに来た。身体を売るのは、ハマっちゃった？】

「ちがうわよバカっ！ ……どうしても、お金が欲しいだけよ……！」

【ま、理由はなんでもいいけどね。じゃ、ホテル行こっか】

「ホテル？ またここで撮影するんじゃ……」

【ロケ地が同じだと新鮮味ないからね。今日はホテルでハメるよ】

「でも……ホテルって……」

【うん、ラブホだけど。え、イヤなの？】

「だって……その、人に見られちゃうじゃない」

今回のロケはラブホで行われる……そう聞いて、ネコ娘は不安を沸かせる。スタジオであれば人もそうそう近くを通らず、誰かに気付かれる心配がないため何とか密会も納得できた。だがホテルで撮影となれば、当然活気のある夜の街を通らなければならない。人目を気にするなら、とても通りたいとは言えなかった。

【まー安心してよ。そんなこともあるかと、

コートとマスク用意してるから。これで顔も見られずに済むよ】

「……随分、用意がいいじゃない」

【今まで色々やってきたからね。その分、色々と保証するよ。報酬とか、機密保持とか、アレもね♪】

「……くだらない……」

無駄に準備がいたため、表面上の拒絶すらやりにくい。苛立つネコ娘を嘲笑うように、やはり少年の思い通りに事が進んでいく。

(確かに……これならバレないけど……)

上手く姿が隠せたとはいえ、ホテルに行くことへの緊張は消せない。むしろ現実的な手段を取ったことで、自分がやろうとしていることを生々しく実感させられる。

(アタシ……ホントに行くんだ……こんなヤツと、ホテルに……)

【震えてるよ？ ラブホ行くのそんなに興奮する？】

「だ、黙りなさい……！」

少年の言葉について感情的に返す。だが、悔しいことに僅かながら興奮しているのも事実であった。無論、緊張の方が遥かに大きい。負の感情に比べれば興奮などずっと小さなものではあるが……

初めての快樂、肉の悦びを刷り込みされた身体は本能的に少年を求め、否応なく肉体を発情させていた。時間をかけてホテルへ向かうことで、この人間との行為も近付いているのだと考えさせられ、自然と行為の際の快樂も想起してしまうのだ。ホテルを利用することは、こうやって行為のことを考えさせることも目的なのではないか。そう思えるほど、ネコ娘は刷り込まれた肉悦を何度も何度も思い出していた。

(ホテルで……ラブホで、されちゃう……！ また……イカされるの……？
そんなのイヤ！ 今日は……絶対、イカない……！)

昂揚を押し殺そうと、怒りを湧き上がらせて心に誓い、豪華な部屋に入る。

【さて、早速はじめよっか♪】

「その前に、ちゃんと約束して。絶対誰かに見せないって」

【大丈夫だよ、そしたら脅せなくなるし。

あ、ちょっと待って。サイトの更新しないと動画が投稿されちゃうから】

少年が携帯端末を操作した後、ネコ娘に画面を見せて動画公開日を一日だけ変更する様子を見せる。こうして公開日を遅らせ続けなければ、裏サイトに自動で投稿される。ならばログイン時に覗き見てパスワードなどを覚えれば、とも思ったが、やはり簡単に隙を見せてはくれない。

(厄介だけど……どこかに付け入る隙があるはず！
あんな姿……こいつの手元にだって置かせない……！)

いつか必ず立場を逆転させる。その機を内心で待ちながら、また指示通りに別の衣装に着替える。

【おー！ やっぱいいね、そのキャンギャル服！ オトナって感じで似合ってるよ】

「そりゃどーも」

着替えたのはネコ娘が持参するよう指示されたキャンギャル衣装。白いジャケットに赤と黒のタイトスカートが目立つ派手な服だ。赤毛のネコ娘に似合っていると仕事仲間にも評判の衣装だが、少年はネコ娘を調べた時にこの姿を見ていたらしくリクエストしてきたのだ。

(まさか、この服でヤラれるはめになるなんて……)

様々なバイトを掛け持ちしているネコ娘だが、軽い気持ちで勤めているわけではない。どんな仕事も人間以上に真面目にこなしており、それだけに仕事に対する熱意や誇りも人一倍だ。ゆえに、興奮するという理由で見られること自体にも嫌悪感が沸き、更に行為に及ぶとなれば仕事に対する熱意すら踏みにじられたような気さえしてくる。ジロジロと眺め、あらゆる角度から撮影した後、少年がカメラを置いて近寄る。

(は、始まる……！ 最後にあれを聞いとかなきゃ……
あれを使われたら、また……変になっちゃう……
あれだけは絶対に使わせないようにしないと！)

いよいよ事に及ぶ……それを目前にして、ネコ娘は最後に確認する。

「ところで、あのマタタビはもう使わないでよね」

【ああコレ？】

「っっ?!?!」

(ま♥ またたび♥ ダメなのに♥ あ……………♥♥)

確認したいこととはズバリ、マタタビのことだ。
売春することは受け入れられた。だが、マタタビによる異常な興奮だけは避けなければならない。
身体を許すことを条件に、それだけは了承させなければ……
そう思って確認を取ろうとした瞬間、不意打ちでマタタビを突き付けられる。
本能を強制的に蕩かせる匂いを嗅がされ、効果が出る前に反射的に少年ごと跳ね除ける。
だが『絶対に使わせてはならない』と思っている、
つまり『使われれば絶対に発情する』と認めているものが簡単に跳ね除けられるはずもなく
瞬時に火照った牝肉がベッドの上でヒザをつく。

【なんか前より効いてない？ イヤがってた風にしてるけど、
どうせカネよりこっち目当てなんでしょ？】

少年からすれば予定調和だったか、クスクスとした嘲笑と共に発情具合を観察される。
潜在的な願望を突かれ、何より興奮で唇が痺れて即座に言い返せない。
膂力も既に常人以下になり、完全に抵抗不可能。
あれほど避けなければと思っていた事態にあっさりと陥り、
悔しさと昂揚で高鳴る胸に少年の手が這い寄ってくる。

【やっぱり気持ち良い？ ほら言ってみてよ、マタタビ目当てにマンコ売りましたって】

「ち……がう♥♥ アタシ♥♥ そんなの♥♥ 目当てなんかじゃ♥♥」

ぎゅちっ♥

「あっひ♥♥」

愛撫もされていないのに既に乳首は硬く尖っており、
服の上から乳首を摘ままれれば甘い電流が奔り、否定の言葉が嬌声に変えられる。
欲していた刺激を受けたことで、
触れられていない方の乳首も勃起し、秘肉は早くも粘液を零した。
いくら心のどこかで期待していたとはいえ、あまりの昂ぶりようにネコ娘自身も驚くが……
ホテルに向かう道中で疼かされ、マタタビで一気に発熱した牝肉が

性感帯を触れられればこうなるのはもはや必然であった。
これ以上触られれば、またあられもない悲鳴を上げてしまう。
無駄と分かってても胸を押さえ隠すが、
少年にあっさり押し退けられて両胸を掴まれる。

【うわ、コリッコリじゃん。乳首イキそう？ ていうか効きすぎでしょ】

「効いて、ない♥♥ イツたりなんか……だからっ♥♥ 触らないでっ♥♥」

がしっ♥ ぎゅむうっ♥

「あっはあっ♥♥ や♥♥ やめええっ♥♥」

【触って欲しいって言ってるようなもんじゃん♪

前までイッたこともなかったのにもうイク寸前だし。

どうせイクだろうけどイヤなら我慢してみなよ。何秒我慢できるかな〜♪】

小さな手が胸を歪め、指先が乳首を押し潰す。
片方だけでも危ういというのに、両方責められなどすればいよいよ絶頂感が込み上げる。
あまりに敏感すぎるためか、少年は絶頂までの秒数を数えるという挑発をするほどだ。
だがプライドをコケにされ、絶頂が近付いたことで
ネコ娘は『今日は絶対にイカない』という自分への誓いを思い出す。

【に〜い。さ〜ん……】

もみゅ♥ むにゅん♥ ぎゅむうう……っ♥

「あ♥ い……かないっ♥ 何秒だって♥ 我慢……できるうっ♥」

(イカないっ♥♥ こんなヤツにっ♥♥ 気持ち良くなったりなんかっ♥♥)

くりいっ♥♥

「あ♥♥」

(ダメ♥♥ イク♥♥ ダメダメダメイカないイカないイカナっ♥♥)

ぎゅちいっ♥♥

「っっっあ♥♥♥ あ♥♥♥ ちがうのこれ♥♥♥

イッてない♥♥♥ イッてないっからあああああああっ♥♥♥」

強がった瞬間、乳首が強く摘ままれて絶頂間近となる。
それでも意志力だけで踏みとどまるが……更に捻じられたことで快感が一気に増加。
発情した牝猫にはとても耐えられるような快樂ではなく……
目を裏返させて苦し紛れに言い訳を叫びながら、
びくんっ♥ がくんっ♥ と痙攣する。
言葉ではどう言い繕っても明らかな絶頂であり、
余計無様さを演出したことがまた少年を愉快にさせてしまう。

【はい、イッたー♪ 四秒でイクってどういうこと？ 五秒も保たないとか恥ずかしくないの？】

「はっ♥♥♥ は……っ♥♥♥ イッ……て、ない♥♥ イッてない、から……♥♥♥」

【このザマでよく強がれるね。まあいいよ、
じゃあ続けるから我慢してね。ご~お……ろ~く……】

くりっ♥ きゅきゅうっ♥

「ひっ♥♥ またっ乳首っ♥♥ い♥♥ イッてない♥♥ イカない……からああ♥♥」

(イッてないっ♥♥ 今のはイッたわけじゃないっ♥♥

こんなのでイカされるはずがないのよっ♥♥)

再び乳首が刺激され、たどたどしくも虚勢を張り続ける。

胸中でも自分に言い聞かせて絶頂を否定する。

幸いにも、達したことで乳首は熱しきったため感覚が麻痺しており、受ける快感は若干和らいでいる。

これなら簡単にはイカされないはず……浅はかな思考を掻い潜り、少年の手の一つが乳首を離れる。

くりっ♥ ぬちゅうっ♥

「ふひっ♥♥ そこっ♥♥ そこはあっ♥♥」

いつの間にか股間に伸びていた少年の手がスカートをめくり上げ、

パンツの上から陰核と秘肉を弄っていた。

乳首に意識を集中していたためネコ娘は面食らい、浅い知識で抽象的な呼称を続けてしまう。

『そこ』もまた乳首同様に硬くなっており、布越しに触れられただけで痛烈な電流が迸る。

牝孔に潜り込んだ別の指に襞を掻き回される刺激で性器が更に感度を上げさせられ、

より敏感になった陰核が圧迫され、再び大きな快樂の波が牝猫の官能を押し流す。

「そこっ♥♥ そこおっ♥♥ イカないからっ♥♥ イカナっ♥♥」

ぐちゅうっ♥ くりいいっ♥♥

「イっ♥♥♥ そこおっ♥♥♥ そこおおっ♥♥♥ イカないのっ♥♥♥

イッてっ♥♥♥ なひいいいいいいっ♥♥♥」

【はい、八秒~♪ それでイッてないつもり？ ホントに無様で可愛いね♪】